

研究ノート

## 古代日本語における異文化の要素

——南島神話と日本神話の固有名詞にみられる後置修飾表現——

黄 當時  
沖村由香

〔抄 録〕

古代日本語の語彙には、日本語一視点のみでは正確に理解できないものがある。

現代日本語は前置修飾構造である。しかし、かつて日本社会には、後置修飾構造を持つ言語が存在し、その痕跡は『記』『紀』の固有名詞に残っている。

日本神話の中の日向神話や創世神話とポリネシアなどの南島（オーストロネシア）の神話に類縁関係があることは、古くから神話学者によって指摘されてきた。

オーストロネシア諸語は後置修飾構造であるが、それらの神話と類縁関係のある日本神話の主人公の名前を分析すれば、その名前には後置修飾構造が見られる。

これは、神話はその言語の話者によって日本に伝えられた証拠であろう。

古代の日本語の問題を考え、古典を読み解くのに、ポリネシア諸語等の外国語の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

**キーワード** 彦火火出見、イワナガヒメ、日向神話、バナナ型神話、釣り針喪失譚

### 1. はじめに

現代日本語は前置修飾構造である。しかし、かつて日本社会には、後置修飾構造を持つ言語が存在した。その痕跡は『記』『紀』の固有名詞に残っている。

黄(2011)において、「『日本書紀』に見られる人名の、彦火火出見尊は、後置修飾表現の「彦-火火出見」と、前置修飾表現の「火火出見-尊」とが混在して用いられる社会で生まれたハイブリッド表現である」と指摘した。

「彦(ひこ)」という名詞について『古典基礎語辞典』は「ヒ(日、太陽)とコ(子、男子)とから成り、太陽の子、または太陽の神秘的な力を受けた子の意。単独では使われず、尊称として男神や男子の名前の上または下につけて用いた(大野2011:1017)」と解説している。

尊称とは、敬称の一種であり、特定個人を呼ぶ特別の呼び方の代名詞型と、人名や役職名などの後に添えて、その人に対する敬意を表す語の2タイプの用法がある。

彦火火出見尊の「尊」は尊称であるため、「彦火火出見尊」という名前は、「彦」と「尊」の二つの尊称が重複して使用されていることになる。

『古典基礎語辞典』は「名前の上または下につけて用いた」とするが、「名前の上」に尊称をつける彦-〇〇という形式は、上代には使用されたものの、古代の早い時期にみられなくなり、〇〇-彦という形式が主流となったようである。更に時代が下がれば、「彦」は固有名詞と一体化し、「尊称」としての働きを失ったと考えられる。

本稿では、言語学的視点のみならず比較神話学の研究成果を参照して、古代天皇家に多く見られる「彦-〇〇」型の固有名詞の由来を探り、古代日本社会に後置修飾構造を持つ言語が存在したことを明らかにしていきたい。

## 2. 彦火火出見尊と南島神話

### 2-1. 彦-〇〇型の固有名詞

『日本書紀』の中で、「彦-〇〇」という形で、彦が語頭に立つ人名は、天皇家の祖先と皇族や神の名前に見られる。これらは、神代から神武天皇の息子の代まではほぼ連続して出現するが、その後出現頻度が減り、敏達天皇の太子であり、継体天皇の曾孫である「彦人皇子」を最後として、『日本書紀』からは姿を消す<sup>(1)</sup>。彦-〇〇型の固有名詞を『日本書紀』登場順に並べれば下記ようになる。

- ①彦狭知神（神代下第九段第二の一書）
- ②彦火火出見尊（初代神武天皇の祖父・山幸彦）
- ③彦波瀲武廬茲草葺不合尊（神武天皇の父）
- ④彦五瀬命（神武天皇の兄）
- ⑤彦火火出見（神武天皇の諱）
- ⑥彦稻飯命（神武天皇の弟・第十一段第四の一書）
- ⑦彦八井耳命（神武の第一子）
- ⑧彦五十狭芹彦命（孝靈天皇の皇子、別名吉備津彦）
- ⑨彦狭島命（孝靈天皇の皇子）
- ⑩彦国率尊（孝元天皇）
- ⑪彦太忍信命（孝元天皇の皇子。武内宿祢の祖父）
- ⑫彦湯産隅命（開化天皇の第一皇子。亦の名を彦蔣簀命。丹波の竹野媛の息子）
- ⑬彦坐王（開化天皇の皇子。丹波比古多多須美知能宇斯王（『記』による）の父）

- ⑭彦五十狭茅命 (崇神天皇の皇子)
- ⑮彦狭島王 (崇神天皇皇子豊城入彦命の孫)
- ⑯彦人大兄命 (景行天皇皇子)
- ⑰彦国葺 (孝昭天皇皇子の天足彦国押人命の三世孫または四世孫。和珥氏の遠祖)
- ⑱彦主人王 (応神四世の孫、継体天皇の父)
- ⑲彦太尊 (継体天皇の別名)
- ⑳彦人大兄皇子 (敏達天皇皇子。継体天皇の曾孫)

これら20例以外に、「大日本根子彦太瓊天皇 (孝霊天皇)」「大日本根子彦国率天皇 (孝元天皇)」「稚日本根子彦大日日天皇 (開化天皇)」のような「〇〇-彦-〇〇」の構造を持つ名前は、本来は「彦-〇〇」型の名前であったが、後世に「大日本根子」や「稚日本根子」のような称辞が前置修飾した可能性がある。(【表1】参照)

但し、新編日本古典全集『日本書紀』では、孝霊天皇の和風諡号「大日本根子彦太瓊」について、「大日本根子彦」は以下三代の天皇の称辞で (小島他1994:255) と述べ、「大日本根子彦」までを修飾部分とみなしている。しかし、後代の天皇諡号と比較するならば、称辞として後世に追加された部分は「大日本根子彦」ではなく「大日本根子」とすべきと思われる。

神武以下九代の天皇名、所謂、和風諡号については、天武以後の和風諡号との親近性があることから、後世の作為が論じられてきた (山田1973) が、問題の「大日本根子彦太瓊天皇」「大日本根子彦国率天皇」「稚日本根子彦大日日天皇」を天武以後の和風諡号と比較すれば、『続日本紀』記載の「大倭根子天之広野日女尊 (持統天皇)」、「倭根子豊祖父天皇 (文武天皇)」、「日本根子天津御代豊国成姫天皇 (元明天皇)」、「日本根子高瑞浄足姫天皇 (元正天皇)」などと親近性があると思われる。そして、これら『続日本紀』の3例は、いずれも「大倭根子」「倭根子」「日本根子」の部分が称辞部分と思われる。つまり、『続日本紀』にならうならば、「大日本根子」「稚日本根子」が後世追加され、ある時点までの原型は「彦太瓊」や「彦国率」「彦大日日」だったとみるべきだろう<sup>(2)</sup>。『日本書紀』本文が「大日本根子彦国率天皇 (孝元天皇)」を彦国率尊と表記していることも忘れてはならない。小島、他 (1994:259)。

このように、見かけ以上に古代天皇名には「彦-〇〇」型の名前が多く伝承されていたと思われる。但し、これについては、他の名前の詳細な分析を含めて、なお明らかにすべき点が多いと思われるため、まずは、確実に「彦-〇〇」型と表記されている名前について考察していきたい。

上記20例の中で、④～⑥は、神武天皇 (⑤) とその兄弟 (④と⑥) だが、神武の兄弟の名前や誕生の順番は、『日本書紀』の正文と一書により異なり、4人兄弟であることだけが一致している。この4人兄弟はいくつかの別名を持つが、4人の中で、「彦-〇〇」形式の名前を持たないのは、三毛入野命一人である。神武の父と祖父もまた「彦-〇〇」形式の名前を持つこと

と、神武自身の諱が、祖父と同じ「彦火火出見」であることから、「彦-〇〇」形式の名前の起源は、系譜に無関係の神名である彦狭知神を除外すれば、彦火火出見尊にさかのぼることができると思われる。

## 2-2. 釣り針喪失譚

神武天皇の祖父である彦火火出見尊（別名、山幸彦）には、「海幸・山幸」の名で知られる次の伝承がある。

山幸彦には、兄の海幸彦が居た。海幸彦は、海の幸を得る霊力があり、山幸彦は山の幸を得る霊力があつた。二人はある日獵具を交換し、山幸彦は魚釣りに出掛けたが、兄に借りた釣針を失くしてしまう。元の釣り針を返すように海幸彦に責められ、山幸彦は、釣り針を探して海神の国を訪れる。そこで、海神の娘である豊玉姫と結婚して生まれたのが彦波瀲武廬茲草葺不合尊（神武天皇の父）であつた。

文化人類学者の後藤明氏は、海幸・山幸神話について、次のように述べている。

日本の研究者は古くから海幸・山幸のモチーフが外国、とくに東南アジアからオセアニアに見られることを指摘してきた。さらに釣り針を失うのは、「釣り針喪失神話」として環太平洋的な分布をすることで知られている（後藤2002：135）。

後藤氏はこれに続けて、インドネシアのスラウェシ島北部のミナハッサ族、インドネシアのモルッカ諸島のケイ島、ミクロネシアのパラオ諸島、メラネシアのソロモン諸島のチョイセル島などに見られる「釣り針喪失神話」を例にあげている。

後藤氏の例に上げた神話の伝承された地域、インドネシア、メラネシア、ミクロネシアの人々は、オーストロネシア語族の中のマライ・ポリネシア諸語の話者である。

マライ・ポリネシア諸語には、後置修飾構造を持つという特徴がある。また、それらの言語では、敬称や尊称は人名の前に付く。そしてマライ・ポリネシア諸語で語られた神話と共通する日本神話の中に「彦火火出見尊」という、人名の前に尊称がついた名前が出現する。つまり、神話の分布圏の言語の特徴が、主人公の名前に反映していると考えられるのである。

神話というものが、どのような経緯で異なる言語や文化を持つ世界の各地に伝播したかについて、具体的なことはわかっていない。しかし、おそらくは、神話を持つ集団の移動を伴って伝播したのであり、神話を持つ集団の「言語」を介して物語が伝えられたと見るべきだろう。

後藤明氏は、「かつてこの日本の海幸・山幸神話はインドネシア方面からもたらされたと考えられていた。とくに隼人の起源を語るのに、オーストロネシア系の隼人族がもたらしたとも

言われている (後藤2017:198)」とするとともに、釣り針喪失譚<sup>(3)</sup>の広がりとして

この種の話の一つの脈流は中国・長江流域の白<sup>はくじょうし</sup>娘子や化け鯨<sup>なまず</sup>といった民話であろうと大林太良は考えている。また民話学者の斧原孝守は長江上流の少数民族の間にも釣り針喪失譚のモチーフを見いだしている。この地は、漢民族に支配される以前はいわゆる呉越の土地で、漢民族とは異なった文化、おそらくオーストロネシア系文化が及んでいた可能性がある (同:200)

と述べ、釣り針喪失譚が、環太平洋地域だけでなく東アジアに色濃く分布する点に注意を促している。

「釣り針喪失譚」が、マライ・ポリネシア諸語文化圏から直接日本に伝播したのか、或いは、中国南部経由で伝播したのか、その双方の流れがあったのかについては神話学者の意見は分かれる。しかし、神話の残存地域はオーストロネシア系後置修飾構造の言語の地域である。更に、中国南部や台湾諸語も後置修飾構造言語であることから、「釣り針喪失譚」の伝播ルートは、後置修飾言語地域を避けて通ることはできない。主人公「彦火火出見」の名前に、神話の伝播元の言語の影響があることは、いたって当然の現象ではないだろうか。

### 3. 磐長姫

#### 3-1. バナナ型神話

彦火火出見の釣り針喪失譚以外にも、南島神話と共通する日本神話がある。そしてその中に後置修飾構造を持つと思われる名前がある。

『日本書紀』神代下第九段の第二の一書と第六の一書に「磐長姫」という名前の女性が登場する。彦火火出見尊 (山幸彦) の伯母にあたる女性である。

この磐長姫と妹の神吾田鹿葦津姫 (木花開耶姫) の物語も、オーストロネシア神話と共通のモチーフを含んでいる。これは、海幸・山幸神話と共に、日向神話とも呼ばれ、極めて南島神話の影響が強いとされている物語である。以下、『日本書紀』神代下第九段の第二の一書を要約する。

日向の高千穂峰に降臨した天津彦火瓊瓊杵尊は、海浜で一人の美人に出会う。大山祇神の子神吾田鹿葦津姫 (亦の名は木花開耶姫) である。木花開耶姫を妻にと臨む天津彦火瓊瓊杵尊に、大山祇神は、木花開耶姫だけでなく姉の磐長姫も奉る。しかし、天津彦火瓊瓊杵尊は、姉は醜いと思い、妹だけを召した。

そこで、磐長姫は、大いに恥じて呪いをかけて「もし、天孫 (ニニギ) が私をお召しになっ

ていたら、生まれる御子の命が長いことは、磐石のように永遠だったでしょう。しかし、そうならず妹だけをお召しになった。そのため、生まれる御子の命は、必ず木の花のように散り落ちるでしょう」と言った。

一説には「現世の人は、木の花のようにたちまち盛りが過ぎ、生命が衰えてしまうでしょう」と言ったとされる。

この話は、天皇や人間の命に限りがあることを説明した「死の起源神話」であるが、後藤明氏は、「このイワナガヒメとコノハナサクヤビメのどちらかを選ぶというモチーフは、東南アジアなどに伝わるバナナ型の死の起源神話の一ヴァリエントと理解してよいだろう（後藤2017：251）。」と述べている。この「バナナ型」という名は、インドネシア・スラウェシ島のトラジャ族の次の神話から命名されたという。

はじめ、天と地の間は近く、神が縄に結んで食料を天空から降ろしていた。その食料によって人間は生きていたのだが、ある日、神は石を降ろした。最初の男女は「これは石だ。他のものをください」と叫んだ。それで神は石を引き上げて代わりにバナナを降ろした。二人は走り寄ってバナナを食べた。すると天から声が聞こえた。「バナナを選んだから、お前たちの生命はバナナの生命のようになるだろう。バナナの木が子どもを持つときには、親の木は死ぬ。そのように、お前たちは死に、お前たちの子どもが跡を継ぐだろう。もしお前たちが石を選んでいたら、お前たちの生命は石のように永遠であったろうに」と。  
(後藤2017：251-252)

吉田敦彦氏も「このスラウェシの話はたしかに、人間にゆだねられた最初の選択が、石とバナナそれ自体であるという点で、石と木の花が、それぞれ醜い姉娘と美しい妹娘という人間の形であらわされている日本神話の場合と違っている。しかしながらこの点を除けば、石を捨て植物を選び取ったため短い寿命を与えられたという基本的結構において、二つの話は正確に一致していると言って良いであろう（吉田2007：46）。」と述べ、磐長姫と木花開耶姫姉妹の物語とインドネシア神話との類似を認めている。

磐長姫の妹、木花開耶姫は海幸彦・山幸彦兄弟の母であるため、姉妹の物語は、海幸・山幸神話と一続きの物語でもある。

では、彦火火出見の名前に後置修飾表現の痕跡があるように、磐長姫という名前には後置修飾の痕跡はないのだろうか。

### 3-2. 磐長姫・石長比売

磐長姫という名前について、新編日本古典文学全集『日本書紀』は「磐石のごとく長久不変

の女性(小島他1994:141)」と頭注を付している。「生まれる御子の命が長いことは、磐石のように永遠だったでしょう(生児永寿、有如磐石之常存)。」という磐長姫の言葉(括弧内は原文)もそれを裏付けているかに見える。

しかし、「磐長」を磐石のごとく長久不変の、とする解析は不審である。「磐」は名詞であり形容詞ではない。また原文には「磐石」とあるように「磐石」と「磐」は区別して使用されている。「磐」は必ずしも「長久不変」であるわけではない。何故なら、磐には堅い磐もあれば軟らかい磐もある。柔らかければ、簡単に砕けて細くなるし、石炭のように火をつけることで燃えて消える岩もある。物語のレトリックに嵌まり、磐を不変の存在と誤解したのであろうが、決してそれ自体は長久不変の存在ではない。

『古事記』では、姫の名前は「石長比売」であり、「常に石の如くして、常に堅に動かず坐さむ(山口、神野志1997:122)」とするが、この場合の「石」は、長久不変の比喩ではなく「不動のもの」の比喩となっている。しかし、全ての石が不動なわけでもない。それが大きな石であっても、形状に安定性がなければ「不動」ではないのだ。この文脈の「石」が指すのは、普通名詞の「石」ではなく、「石長比売」の名前に象徴された固有名詞としての「石長」である。この磐長姫という名前を、後世の女性人名と比較するならば源義経の生母の呼び名常磐御前が適当な比較対象と思われる。「ときわ」は「常葉」「常盤」と表記されることもあるが、常「葉」に明瞭に見られるように、葉一字には常緑、永遠などの意味はない。「常」の字の存在が常緑不変であることを保証するのである。

これと同じく「長」の字に修飾されて初めて、「石長」は安定性のある「長大な石」、「磐長」は長久不変の「<sup>とこ</sup>長しえの磐」の靈力を付与されるのである<sup>(4)</sup>。

磐長姫という名前は、「磐石のごとく長久不変の女性」ではなく、「長」を長久不変と訳すならば「長久不変の磐の(靈力を持つ)女性」と、後置修飾で解釈すべきなのである。

## 4. 丹波と南島神話

### 4-1. 籠神社に残る「釣り針喪失譚」

黄(2010)において、丹後一宮である籠神社の名称について、ポリネシア語の「大きな船(kau-nui)」という言葉に由来するのではないかとする説を発表したが、籠神社は、オーストロネシア神話と浅からぬ繋がりがあがる。

和銅6年(713年)以前、丹後と呼ばれる領域は丹波国に含まれていた。地理的には丹波国の北部にあたり、海に面した地域である。

籠神社の神社案内には、「別名を彦火火出見命とも云われたご祭神彦火明命が、竹で編んだ籠船に乗って、海神の宮に行かれたとの故事により、社名を籠宮と云う」と社名の由来が書かれている<sup>(5)</sup>。既に述べたように彦火火出見命は山幸彦の別名であるため、籠神社の名称由来

は、「海幸山幸の物語」と同種のもつと推測される。

「釣り針喪失譚」を共有することから、籠神社のある古代の丹波と南島地域が海上交通で結ばれていた可能性は十分に考えられるだろう。

#### 4-2. 天橋立とイザナキ

釣り針喪失譚のみならず、南島の神話、中でもポリネシア神話と日本の創世神話に強い結びつきがあることは、松本信廣氏、大林太良氏、吉田敦彦氏、後藤明氏等が論じてきた。イザナキ、イザナミのアメノヌボコの神話も、南方系の「島釣り神話」の類型とされているが、ポリネシアを中心にマウイ、ティキ或いはタンガロア神が島釣りをする神話がみられる。

そして、籠神社のすぐ側にある天橋立には、日本神話の創世神であるイザナキが天橋立を作り立てたという伝説が残っている。以下、『風土記』逸文を引用する。

（丹後の国の風土記に曰ふ）

与謝の郡。

郡家の東北の隅の方に速石の里あり。この里の海に長大き前あり。長さは一十二百二十九丈、広さ或る所は九丈以下、或る所は十丈以上、二十丈以下なり。先つ名をば天の椅立といひ、後の名を久志浜といふ。然云ふは、国生みましし大神、伊射奈藝の命、天に通行はさむとして、椅を作り立てたまふ。故、天の椅立と云ふ。（植垣1997：472）

「丹後の国の風土記（逸文）」には、このほかに浦島子伝説や羽衣伝説もある。そして、メラネシアのバンクス諸島には、日本の羽衣伝説に非常によく似ているとされる「天女伝説」がある（山田2017：100-101）。バンクス諸島の住民もまたオーストロネシア語族である。

海沿いにある古代の丹波（丹後）には、濃厚に南島に連なる海洋文化が根付いていた。これは、古代丹波の住民が海洋民的性格を持ち、朝鮮半島や中国大陸方面だけでなく、広く南洋と交流していたことを想像させる。或いは、海を通じての外国との交流が、竜宮や天界などの異界と行き来する話として残されたのかもしれない。

#### 4-3. 彦火明命

籠神社に見られるオーストロネシア文化の痕跡は社名由来譚に留まらない。ご祭神、彦火明命の名前が「彦-〇〇」型の、尊称が上につく構造を持つのである。

『記』『紀』は、これを「天火明命」（『記』）「天照国照彦火明命」「火明命」（『紀』）という、尊称が下につく形式の名で伝えている<sup>(6)</sup>。「彦火明命」は、国宝である籠神社の「海部氏系図」にだけ見られる唯一の表記である。

岡田精司氏は「神社は古代の姿のまま現在まで続いているのではなくて、あとからのいろいろ

るな変化がある」と述べているが、「変化」の一つとして、ご祭神名称を『記』『紀』由来に変更する例がある。例えば、富士山本宮浅間大社の木花之佐久夜毘売命は、近世になって新たに祀られた祭神で(大林2001:108-113)、その表記も『古事記』に倣っている。これは、古代から信仰されてきた自然神や土着の神が、名前が良く知られた『記』『紀』の神にとってかわられた例である。

これに対して「海部氏系図」にも彦火明命の名があることから、この神名表記は『記』『紀』に影響されず古形を保持しているとみられる。古代の言語の実相がそこにあるのではないだろうか。

## 5. 天孫降臨神話の南方要素と欠史八代

### 5-1. 天孫降臨神話に見られる南方要素

神話学では、日本の創世神話と日向神話について、ポリネシアなどの南島世界との結びつきが指摘されてきた。しかし、その中間を占める天孫降臨神話については、「日の神の降下」と「稲」という二つの重要な点は南方要素(三品1971)とする三品彰英氏の見解があるものの、一般的には北方遊牧民族由来の神話とされてきた。確かに、前置修飾、後置修飾という観点から見れば、高天原の神々の名前の中に、彦狭知神以外には一見してそれとわかる形で後置修飾構造が見られないことは、アルタイ系のモンゴル語や朝鮮半島の言語、そして中国北部の言語と合致するようにも見える。

一方、大林太良氏は、天孫降臨神話について、従来の解釈に加えて、インドネシアや台湾などの影響について再考すべきではないかと指摘している。ボルネオのダヤクという先住民族は、黄金の船に乗って山頂から広がる神話を持つ。スマトラ(の神話)もまた山に降りてから、パレンバンなどへ行く。台湾のアタイヤル族の起源神話では、高い山の上で神が人間を生むとされるという(大林、吉田1998:105)。

大林氏のあげた例もまた、オーストロネシア諸語族の地域であり、後置修飾表現を持つ。そして、地上に降臨した天孫「天津彦彦火瓊瓊杵尊」の名前は、「〇〇-彦彦-〇〇」型である。二つの「彦」が連続することから、「天津彦」部分を称辞と見れば、天孫ニニギの名前は前置修飾と後置修飾の混じるハイブリッド的要素を持つことになる。

神話学者は、天孫降臨神話に南方要素を指摘した。そして、天孫ニニギの名に後置修飾要素を見出すことができるとすれば、言語学の観点からも天孫降臨神話に南方要素を認めることができるのである。

### 5-2. 欠史八代の天皇名

天皇家の系譜の中で、第二代綏靖天皇から第九代開化天皇までの八代の天皇は「欠史八代」

とも呼ばれている。これら八代の天皇は系譜のみで、事跡が記載されていないことやすべて直系で継承が行われているなど不自然な点が多いことから、存在自体を架空のものとする「系譜捏造説」を唱える研究者も多い。八世紀の『記』『紀』成立段階で、天皇家の歴史をより古くみせかけるために、架空の天皇を創作したとする説である<sup>(7)</sup>。

しかし、これらの天皇名が全くの創作であれば、八代の天皇名が後置修飾構造と、前置修飾構造のハイブリッド的な名前を持つことは説明出来ない。（【表1】参照）。『日本書紀』成立の八世紀ごろには、おそらく後置修飾構造は日本語から失われていたと思われるからである。

実用的でない長すぎる天皇の名前には、後代の修飾の痕跡が見える。これは、元々は、非常にシンプルな「彦相友」や「彦国押人」のような「彦-〇〇」型の名前が伝承されており、それに後から「大日本根子」のような修飾が施されたと考えられる。これらが、神武と日向三代の名前だけを元に創作されたと考えることは可能である。しかし、神武と日向三代の名前は、欠史八代の天皇名とは一見してその構成要素に類似性が低い。モデルになる「彦-〇〇」型後置修飾構造を持つ天皇名が伝承されていなければこのような創作は困難ではないだろうか。

また、伝承された天皇や皇子の名前から、徐々に「彦-〇〇」型の名前が姿を消すのは、古代日本の言語から、後置修飾が失われていくことと合致している。第九代開化天皇は「稚日本根子彦大日日天皇」であり、既に述べたように「稚日本根子」が「彦大日日天皇」を修辭していると思われる。しかし、次代の崇神天皇「御間城入彦五十瓊殖天皇」は、前置修飾構造の名前である可能性が高い。

『日本書紀』歌謡18に以下の歌謡がある<sup>(8)</sup>。小島、他（1994：279）。

みまきいりびこ おの を し ぬす ひめあそ  
御間入彦はや 己が命を 弑せむと 窃まく知らに 姫遊びすも  
(原文・みまきいりひこはや おのがををしせむと ぬすまくしらに ひめなそびすも  
瀨磨紀異利寐胡播耶 飢迺餓鳥塙 志齊務苔 農殊末句志羅珥 比賣那素寐殊望)

これによれば、「瀨磨紀異利寐胡」は「御間城入彦」と考えられるため、「〇〇-彦」型の名前であると考えられるからである。

この「御間城入彦」崇神天皇を境に、以後の天皇名は「彦-〇〇」とは分析しがたい名前となっていく、「彦」字の使用自体も減少していく。また、「彦」は尊称から固有名詞の一部となっていく。これは、古代の言語の推移の実態をある程度正確に反映したものとみなすことができるだろう。

天皇家の先祖伝承が記録、口承されていたとすれば、それは言語研究の貴重な資料となる。但し、欠史八代の天皇名が伝承されていたとしても、それらの「天皇」が実在していたかどうかはまた別の問題である。政治的な歴史観に左右されがちな古代天皇の実在問題について、科学的かつ実証的な視点で文献資料を分析していくためにも、言語学をはじめ他の学問領域も参照してより科学的手法で天皇名についての考察を行っていくべきであろう。

## 6. かなび

最後に、皇族名以外の固有名詞に残された後置修飾表現を指摘しておきたい。非常に古い地名「かなび」山である。

民俗学者の吉野裕子氏は、かなび山とも言われる大和の三輪山について

三輪山の神が蛇として伝承されてきたのは、その山が一際美しい典型的な円錐形であつて、トグロを巻く巨大な蛇の姿態をよく連想させるからである。三輪山はその名称からしてすでに神蛇のトグロの輪を意味し、<sup>みむ</sup>神輪山の意がこめられている。(吉野1999:66)

と述べ、「出雲および大和で、神奈備山と呼ばれる一連の円錐形の山が篤い信仰の対象とされたのは、三輪山と同様に、それらの山々がいずれも「甕立ての蛇」に擬えられたからに他ならないとして、かなび山信仰の根源にある蛇信仰の存在を指摘した。(同:67)。

同じく、古代日本の蛇信仰に注目した民俗学者の谷川健一氏は、出雲のかなび山について

出雲にも四カ所の「かなび山」がある。佐太神社のうしろの三笠山、あるいは朝日山ともいわれているこの三笠山は、もとの佐太神社があつたところとされている。とすれば、佐太神社のかなび山と蛇神のつながりは容易に推察される。「なび」とか「なみ」とかは蛇を意味する語であるから「かなび山」は神蛇山にほかならぬとする説は捨てがたい。(谷川2012:106)

として、かなび山を「<sup>●</sup>神<sup>●</sup>蛇山」とする説をあげた。そして、吉野氏は「<sup>●</sup>神<sup>●</sup>蛇のトグロの輪」と表記している。しかし、山に象徴されているのは本当に「神蛇」なのだろうか。

神が蛇を修飾した「神蛇」即ち「神の蛇」とは「神のような蛇」に過ぎない。しかし、人々は蛇を信仰しているわけではないだろう。

これを後置修飾で捉えると、「蛇の神」「蛇神」となり、人々の信仰の対象が、蛇ではなく神であることが明らかになる。

「かなび山」「<sup>かん</sup>神<sup>なび</sup>蛇山」とは、後置修飾の構造であり、谷川氏が「蛇神」とも記したように「蛇神山」という意味を持つ名前と考えるのが合理的であろう。

同時に、「神日本磐余彦天皇(神武)」「神淳名川耳天皇(綏靖)」、磐長姫の妹「神吾田鹿葦津姫」などに見られる「神-〇〇」型の名前にもこれと同じ事が言えるのではないだろうか。これら天皇家の祖先たちは、全て「神」として祀られ、半ば神話の世界の住人である。果たして彼らは「神のような」イワレビコや「神のような」アタカシツヒメであろうか。否。おそらくこれらの名前は、イワレビコの神、アタカシツヒメの神を意味している。これら「神-〇〇」

型の名前もまた、後置修飾形式であると考えられる事ができるだろう。

極めて古い信仰を持つ地名に、後置修飾表現が残存する。

これは、日本社会の古層に、「後置修飾」言語が存在した証拠なのである。

【表1】 日向三代と古代天皇の名前

		日本書記	古事記
神代・日向三代		天津彦彦火瓊瓊杵尊	天迩岐志国迩岐志天津日高日子番能迩迩芸命
		彦火火出見尊・火折尊・山幸彦	火遠理命・山幸彦
		彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊	天津日高日子波限建鸕鷀草葺不合命
第1代	神武	神日本磐余彦尊・彦火火出見・狭野・稚三毛野尊	神倭伊波礼毘古命
第2代	綏靖	神淳名川耳天皇	神沼河耳命
第3代	安寧	磯城津彦玉手看天皇	師木津日子玉手見命
第4代	懿德	大日本彦耜友天皇	大倭日子鉏友命
第5代	孝昭	觀松彦香殖稻天皇	御真津日子訶惠志泥命
第6代	孝安	日本足彦国押人天皇	大倭带日子国押人命
第7代	孝靈	大日本根子彦太瓊天皇	大倭根子日子賦斗迩命
第8代	孝元	大日本根子彦国牽天皇	大倭根子日子国玖疏命
第9代	開化	稚日本根子彦大日日天皇	若倭根子日子大毘毘命
第10代	崇神	御間城入彦五十瓊殖天皇	御真木入日子印惠命
第11代	垂仁	活目入彦五十狭茅天皇	伊久米伊理毘古伊佐知命
第12代	景行	大足彦忍代別天皇	大带日子淤斯呂和氣
第13代	成務	稚足彦天皇	若带日子命
第14代	仲哀	足仲彦天皇	带中日子命
第15代	応神	誉田天皇	品陀和氣命
第16代	仁徳	大鷦鷯天皇	大雀命
第17代	履中	去來穗別天皇	大江之伊邪本和氣命
第18代	反正	瑞齒別天皇・多遲比瑞齒別天皇	水齒別命
第19代	允恭	雄朝津間稚子宿禰天皇	男浅津間若子宿禰王
第20代	安康	穴穗天皇	穴穗御子
第21代	雄略	大泊瀬幼武天皇	大長谷若建命、大長谷王
第22代	清寧	白髮武広国押稚日本根子天皇	白髮大倭根子命

〔注〕

- (1) 『新撰姓氏録』にみられる後代の「彦-〇〇」型の名前は除外し、『紀』のみを考察対象とする。
- (2) 岩波文庫『日本書紀』でも「(7) 孝霊・(8) 孝元・(9) 開化の、少なくともヤマトネコの部分は、記紀編纂時代に加わったとみるのが自然であろう(坂本他1994:411)」としている。
- (3) 後藤(2017)では「譚」使用のため、以下「釣針喪失譚」とする。
- (4) しかし、「イハナガ」ヒメという固有名詞については、これを「石長」や「磐長」という漢字を用いて表記した結果、「バナナ型神話」と結びつき、それを構成するような意味が生じた可能性があり、「イハナガ」という「音声」自体が、当初からそのような意味を持っていたかは大いに疑わしい。イハナガヒメ、サクヤヒメ姉妹は波の上で機を織る織姫としての神格を有しているが、その織姫神話は南島神話の影響に覆い尽くされたか、岡山県の民間伝承にわずかに痕跡が見いだせるのみである(井関2013)。
- (5) 籠神社 HP に同様の記載がある。<http://www.motoise.jp/about/#02> 最終アクセス2018年10月6日。
- (6) 『先代旧事本紀』の「天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊」も或いは同神かとも言われる。
- (7) また、後代の天皇名との名前の類似、例えば、27代安閑天皇の「広国押建金日」と弟の28代宣化天皇の「建小広国押楯」、6代孝安天皇「日本足彦国押人」に「国押」がみられることから「国押」の例がしきりにみられる(井上1973:296)ことを理由に、実名ではなく称号であり架空の名前とする考えがある。しかし、安閑、宣化天皇は兄弟であり、兄弟の名前が類似することは不思議ではない。天皇の和風諡号にはおそらく後世の装飾部分が存在すると思われるが、従来の説に顕著な「時代の新しい天皇名(27代、28代)から古い天皇名(6代)が創作されたとする一方方向の解析は、果たして科学的であろうか。名前には流行があり、古い時代に流行した名前が再び使われることも多い。従来、歴史研究の一環として解析されてきた天皇諡号や固有名についての議論からは、名前の復古趣味や親族間での名前の継承といった観点が抜け落ちている。「彦火火出見」という同じ名を神武と祖父の彦火火出見が共有することは、神武と彦火火出見が同一人物という説を生み出した。しかし、台湾先住民族では男子は祖父、女子は祖母の名を継いで用いることが広く行われていたという(穂積1992:49)。このような民族的視点を欠いた従来の天皇名の考察には大いに問題がある。
- (8) 『古事記』歌謡23にも類似の歌謡がある。

〔参考文献〕

- 井上光貞1973。『日本の歴史1—神話から歴史へ—』中央公論社。
- 井関和代2013。「織り仕事の神様「木花開耶姫」」『BIOSTORY 20』60-63誠文堂新光社。
- 植垣節也1997。『風土記(新編 日本古典文学全集5)』小学館。
- 大野晋編2011。『古典基礎語辞典』角川学芸出版。
- 大林太良2001。『私の一宮巡詣記』青土社。
- 大林太良+吉田敦彦1998。『世界の神話をどう読むか』青土社。
- 岡田精司2011。『新編 神社の古代史』学生社。
- 黄當時2010。「古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について 籠神社を中心に」『文学部論集94』65-81 佛敎大学文学部。
- 黄當時2011。「金印「漢委奴国王」の読みと意味について」『中国言語文化研究第11号』佛敎大学中国言語文化研究会。
- 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994。『日本書紀①(新編 日本古典文学全集2)』小学館。
- 後藤明2002。『南島の神話』中央公論社。
- 後藤明2017。『世界神話学入門』講談社。
- 坂本太郎、井上光貞、家永三郎、大野晋校注1994。『日本書紀(1)』岩波書店。

- 崎山理2017。『日本語「形成」論 日本語史における系統と混合』三省堂。  
谷川健一2012。『蛇—不死と再生の民俗』富山房インターナショナル。  
穂積陳重著・穂積重行校訂1992。『忌み名の研究』講談社。  
三品彰英1971。「神話と文化境域」『神話と文化史 三品彰英論文集第三巻』平凡社。  
茂在寅男1981。『日本語大漂流 航海術が解明した古事記の謎』光文社。  
茂在寅男1984。『歴史を運んだ船——神話・伝説の実証』東海大学出版会。  
山口佳紀、神野志隆光1997。『古事記（新編 日本古典文学全集1）』小学館。  
山田英雄1973。「古代天皇の諱について」『日本書紀研究第七冊』塙書房。  
山田仁史2017。『新・神話学入門』朝倉書店。  
吉田敦彦2007。『日本神話の源流』講談社。  
吉野裕子1999。『蛇』講談社。

（こう とうじ 中国学科）  
（おきむら ゆか 有限会社第一産業）

2018年11月15日受理